

シーン5

最後の触手壁と二人

ユリアーナ姫 「ふう、あのベッドでもう少し休めば良かつたですわね」

アンナ 「あ、あんな変態触手がいる場所からは一刻も早く脱出すべきです……ああ、出口が見えましたよ姫様！」

ユリアーナ姫 「もうちょっと、ピロートークも樂しみたかったのですが。ああ、この通路を抜けるとダンジョンの入口でしたね。ただ……」

アンナ 「左右の壁は触手だらけですね。トラップを隠しもせずに……ここは私がお抱えして」

ユリアーナ姫 「私には魔法のドレスがあるので大丈夫ですよ。それより、アンの方こそ先ほどのベットの上での同衾でだいぶ疲れているように見えますが……」

アンナ 「特に姫様との伽が壮絶で……」

アンナ 「ではなく！ ともかく私に続いて、前の出口だけを見て走ってください！」

ユリアーナ姫 「はっ、はっ……」

アンナ 「ハッ…… エントランスに出ます。あと、数歩でっ！」

ユリアーナ姫 「はっ、ふうっ…… 触手さんも途切れ……えツ、解呪の、鏡……きやあっ！」

アンナ 「姫様!?」

ユリアーナ姫 「つ、アン、構わず行ってください！」

アンナ 「姫様を置いてなど…… 私は姫様の騎士です。命に代えても、アンが姫様を守ります！」

ユリアーナ姫 「ああ、間に合いませんでした……」

アンナ

ユリアーナ姫 「でも、アン、今までのよう、えっちなことをされるだけ、ですよ？」
アンナ 「えっ?!」
ユリアーナ姫 「あ、ああ、身動きが…… 触手さんの壁に、挟まれてしましました、わ
♡」

アンナ 「んっ、んう！ このつ鎧を…… ああっ、姫様のドレスにまで手をかけ…… ひつ
!? なな、この柱のように太いのも触手なのですかっ？」

ユリアーナ姫 「まあ、まあ♡、それは……ああ、言えばアンが気絶してしまうかしら
♡」

アンナ 「ひや、あ♡ わ、私は騎士です、姫様を残して気絶など……ぢゅるッ!?
ちゅつ、んツ口に無理矢理?……こんなに大きな先っぽ、舐められない……れりゅう♡」
ユリアーナ姫 「はあ、む♡ 大きいのも無理はありませんわ。だってこの子はあ……女
の子のに卵を植え付けるための触手さん、だそうですの♡ ドロドロの潤滑液を吐き出し
ながら、子宮を押し広げて……レエロ♡ 10個でも、20個でも詰め込んでしまうつもり、ですって♡」

ユリアーナ姫 「ああ、この逞しい触手さんが私の処女を奪つてくださるのですか……
少々怖いですがこれも約束ですから、んあ♡」

アンナ 「姫様あ……はあ、はあッ！ 姫様の清らかな子宮に、触手の卵を、などと……
ぢゅるるッ！ つくうつ、私は姫様の騎士なのに、なんでこんな……媚薬毒のせいだっ、
くう、今までのこと、子宮が思い出してえ♡ んちゅ♡ ああ、すみません姫様♡」
ユリアーナ姫 「いいのです、アン。私もアンと触手さんの逢瀬を見て……その、はした
ないですがとても興奮して妄想などしてしまいましたから……ちゅぱつ、それに触手さん
の媚薬入りの精液を頂ければ、きちんとこの逞しいものを受け入れられるおマンコにして
いただけますから♡ ちゅうう♡」

アンナ 「ああ、姫様と一緒に、触手にご、ご奉仕することになるなんて!! ちゅ♡
ちゅ♡ 姫ひやま♡ ん、ひめしゃまとのキス思い出しちゃうなんて、私、変態、変態騎
士ですみましょん♡ ちゅ、ちゅう♡ ちゅ……ぢゅるるッ♡ れりゅつ、れえる♡
はあむつ、ぢゅむうツ♡」

ユリアーナ姫 「くすっ、可愛らしい……指で幹を扱いて差し上げて、ヌルヌルとイボイボをしつかりと手の平に擦りつけ……はあむ、固い先っぽを舐めまわひて……すっかり、触手さんへのご奉仕が上手くなつて、私も見習わないと、れえる♥ れりゅつ、はあむ♥ いけませんね♥……大きく、咥え、へ……ああむつ、はむうツ♥♥♥」

ユリアーナ姫 「はっ、あ♥ 触手さん、びくびくって喜んでいます♥ そろそろなのですね。ドロドロのザーメンを、私たちにぶっかけて♥ 子宮を拡げられても喜ぶ身体に変えて頂いて……れえろツ♥ 触手さんの子を孕んじやうんですね♥……ぢゅつ、ぢゅるう♥」

アンナ 「んっぶ、んぱう♥ 喉、当たつてりゅ♥ 中で大ひく……ぢゅむうう♥ れりゅるつ、へりゅつ♥ ああ、出てくる、精液の匂いが濃くなつて♥ 媚薬毒入り精液♥ 身体が喜んでるう♥ ぢゅつちゅ、れりゅう♥ 姫様、ひめしゃまあツ♥」

ユリアーナ姫 「はあむ♥ アンつたらすっかり触手さんのザーメンの虜ですね♥ 私も♥ 触手さんの孕ませ汁で体中ににおい付け♥ していただきたいです♥ ぢゅるつ、ぢゅむつ、ぢゅちゅつ、んむうツ♥」

アンナ 「や、やつ、やつぱり止めへえ♥ ぢゅっぶ、ぢゅるう♥ 私どんどんエッチな体になつていつちやう……んむううツ! 乳房を締め付けないれえ……はあむつ、んふうツ♥ 好きになつちやう! 触手の匂いも感触も好きになつちやうから♥」

アンナ 「しゃきっぽ、んちゅ♥ 蜜みたに粘液なめてもなめても♥ ぢゅるるつ♥ はあ、はあ♥ レロレロお♥ こんなつ、臭いのにつ、エッチな味もつと欲しいつて♥ はあむつ、ぢゅるう♥ んうつ、ンンツ♥」

ユリアーナ姫 「いらひでくらひやい、触手さん♡ ぢゅるるつ、んくんツ♡ 私たちの
お口に、身体に♡ たくさんたくさん射精を……ん、ふふ♡ 出ひて♡ はあむつ、
ぢゅつぶう♡ んぐぐツ、ぢゅりゅ♡ ぢゅうりゅうつ、ぢゅちゅつ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、
ぢゅううツ……ぢゅりゅるるるうう——ツ♡」

アンナ 「んうぐッ!? 射精♡ んぐつ、むつふううう——ツ♡ 触手の精液♡ あ、あ
あ♡ 飲んだら戻れないのに!! んくんつ、じきゅう♡ んぐつ、んふツ、んつく……
ごつきゅう♡」

ユリアーナ姫 「んぶつ♡ 体の中も外もドロドロでつ、私♡ 達してしまいます♡♡♡
!?」

アンナ 「ふはつ、あああツ♡……んぶううツ！ ひめしやま、姫しやまのイッてる声、
なんへ……ああつ、んはあツ♡ もう我慢できない、せいしーおいひい♡♡♡♡ ド
ロドロの精液、体中にぶっかけられていくううううう♡♡♡♡」

ユリアーナ姫 「はあ♡ はひい……ん、ちゅ♡ とっても熱い精液を頂きありがとう
ざいます。んあ♡ 私の体も溶けるぐらいに熱い♡」

アンナ 「んぶつ♡……んんつ♡ ああ、飲んじゃっちゃ……んつ!! おちんちん、ああ、
姫様の前なのに、あそこが熱くて、こんな、触手ちんぽほしくて身体がうずいてえ♡」

ユリアーナ姫 「はあ、はあつ♡ はあ♡♡♡ 私の騎士も準備できて、ああ♡ これで、
このごつごつで太い触手さんで貫いてくれるんですね♡」

アンナ 「ひうつ♡ あ、あ、あ♡ 私の、姫様のあそこに♡ 私、姫差をお守りする立
場なのに♡ 目、離せない♡♡♡」

ユリアーナ姫 「いいのですよ私の騎士。手をつないでくれてるだけで充分です……あ、んんっ♡ オマンコなでられて私のお汁あじみされちゃって♡……一緒に触手さんのおちんぽで気持ちよくなりましょう♡」

アンナ 「は、はい、謹んでっ！ んむつ♡ ちゅ、ちゅう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ふふ、アンも発情してるのが体温でわかりますね♡ ちゅ♡ 触手さんも大好きな大きなおっぱい、私もご相伴させて……れりゅつ、んつふ♡ は、あ、熱くて柔らかい……触手さんの白濁液でぬるぬるでとっても美味しい♡」

アンナ 「んあっ、ひめしゃま♡ んむううつ、んつふうッ！ は、は、入つてくれりゅ……ぢゅりゅう♡ 触手が、中でせーし塗りつけながら♡ 私のオマンコにずぷぶぶつて♡……あ、ああんッ♡」

ユリアーナ姫 「わ、私の方も……ん、あ♡ 処女オマンコをほぐして……あうう♡ ハーゼンバイン王国第一王女、ユリアーナの純潔を、散らしていただけんんですね……ゆつくりと、中に……はあふつ♡ あ、あ、おつきい♡ ぶちゅつて♡……んつふう——ツ♡」

アンナ 「う、あ♡ ぐすつ……姫様、オマンコでぐっぽりと触手を呑み込まれて……せめて私も姫様の騎士としてえつ♡ こら、私がしゃべちえるとちゅんんんつ♡♡♡！」

ユリアーナ姫 「触手さんも我慢できなかつたみたいつ♡ ああ♡ 中で♡ 初めて殿方を迎えるのにこんな感じツ♡……ああ♡ し、子宮つ♡ 子宮が拡がっていくの、おお♡ お、お城で習つた子作りとじえんじえん違ひまひゅ♡ あふうんッ♡ あ、あ、そこ……ああああツ?!」

アンナ 「ひ、ぎ♡ ヌルヌルの、丸い、の……おおおおッ♡ 入りゅつ、押し込まれへりゅうツ♡……やらやらやらあ♡ 赤ちゃんのお部屋に触手卵入ってる♡♡♡♡」

ユリアーナ姫 「はあっ、はあーっ♡ 1個お♡ ん、ふふ♡……怖くて気持ちよくて苦しくて愛おしくなるの♡ 不思議な感覚ですね♡ ん、あっ♡」

アンナ 「はひ?……ああ、お、おぞましいのに、気持ち悪かったのに、オマンコがジンジンと疼いへきて♡♡……もっと欲しくなっちゃう♡ ひ、ひめしゃま♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あ、あんッ♡ ダメですよ、だってあなたの顔……私と同じでいやらしくくtronけてしまっていますもの♡ あ、んッ♡ 卵、入ってくるたびにおつゆぴゅつぴゅつてなって♡♡」

アンナ 「あぐッ、ああッ♡ ひ、姫様!? オマンコ見ないれえつ♡ はうつ、ああッ♡ イちやうどころ見ないで下さい♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ちゅ、ちゅ♡ ああ、新品だったオマンコが子作り穴に変えられてゆきますわ♡ 触手の卵を頂いて、もの欲しそうに腰を振ってえ……あふんッ♡ 私の騎士、もつとえっちな表情見せてください♡……ちゅ♡」

アンナ 「ちゅ、んちゅ♡ 私もうなにがなんだか♡ ああ♡ ひめしゃま、ひめしゃまあ♡」

ユリアーナ姫 「もっと素直になつてもいいんですよ。えい♡ クニ、クニユツ♡ 乳首もこんなに張つて♡」

アンナ 「は、ああッ♡ 乳首伸ばひちゃ……イぅうううう——ツ♡ あひつ、んふうツ♡ は、はひ、姫ひやまツ♡ アンは姫様に、触手におっぱい弄られてイっちやいます! 卵、触手卵植え付けられるの気持ちですう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あああ、あ、んふうつ♡ 卵、あはつ♡ ふ、2つ……3つう♡ いい、

いくつ植え付けられるのでしよう、ね……あひいツ♡ は、あ……タマタマの中、には：

⋮ 100個は詰まつてらっしやる、ようですが♡ あ、んツ♡ 入っちや……あ、ああツ

♡」

アンナ 「ふはあツ♡ 卵せつくしゆでいくうつ♡ おふつ、ンググウラツ!? あふつ、

ああツ♡ お腹パンパンなのにい媚薬毒のしえいでえ♡ どんどん気持ちよくつ♡ あつはああああ——んつ♡」

アンナ 「はあつ、あつ、あ♡ 突き上げるの待つへえ♡ 子宮で卵潰れひやうう♡ あ、
あンツ♡ し、子宮の中でつ、ごちゅごちゅぶつかつへ、んはあツ♡ ううううつ、内側
からも感じちやうのおおツ♡ こんにゃ、こんにゃの覚えたなら勝てなくなりゅ♡ アンは、
騎士なのに触手見るだけでお股ぬりやしちやう変態になつちやう♡ んあつ♡ うううつ、
姫ひやまあ♡ ひめしゃまの騎士なのにエッチになつちやつて♡ 申し訳♡ あ、ああ♡
あああ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「んつ、ああツ♡ もう、もう、気持ち良さそうに鳴いて……ちゅつ♡
あ、ああツ♡ 私まで感じてしまいまひゅわ……は、あツ♡ 触手のおちんぽでつ、子宮
を叩かれながら……あふつ、ああツ♡ あ、あ♡ アンの子宮の中を、妄想しながらあ：
⋮ ひうつ、んふううツ♡ ヌルヌルの卵でいいっぱいの、えつちな子宮う♡ はつ、あ、
子宮、子宮♡ ひぐうツ♡ あ、あ、あたたか、そう……はあふつ、ああツ♡」

アンナ 「んひいツ♡ は、はひ♡ 卵、植え付け、きつたの……んあつ♡ ぴしゅとん
しゅごい♡♡♡、いまひゅう♡ はあひつ、んはあツ♡ じゅつぽじゅつぽピストンひ
て、ああツ！ 射精!? 卵に精子びゅーってしちやう準備してるう……あ、あ、ああツ

♡」

ユリアーナ姫 「ああっ、ああッ♡ あの熱い精液♡ 卵でいっぱいになつた私たちに注いで♡ んちゅ♡ 周りの触手さんたちも♡ ふう、ふあつ♡ 先走りのお汁いっぱいご馳走してくれて♡♡♡」

アンナ 「ああっ、ああッ！ 卵育つて!? お腹もつとパンパンひないれつ♡ イつてるの!? おほっ♡ 身体が精子おねだりしちゃつてるう♡♡♡ これ以上、イッたらあ、あ、あっ♡ あーーー♡」

ユリアーナ姫 「ああ、触手おちんちんに精液上つてきてるのがわかる！ 二人一緒にい♡ ああっ、んふうつ♡ 周りの触手さんも一緒に♡ 種付けしゃせい♡♡♡！－！－！－！－！－！－！」

アンナ 「あああああ♡♡♡ ひめしやま!? はしたないお顔でイッてらしやつて…：んひい、私もイッちゃします！ 触手せーしになかもそともいっぽいしゃせいしてもらつて♡ ヾくううつつ——♡♡♡!?」

ユリアーナ姫 「あ、あ♡ セーしいっぱい♡！ んぶつ♡ 私イクの止まらない♡♡♡ 触手さんおちんちん！ もっと、もっとくだしやい♡♡♡！－！－！」

アンナ 「お、お腹が膨れるつ、重い…は、うう！ 中に卵詰まつてるのつ、もう注ぎ込まないれ！ 中出ひ気持ちよしゅぎておかしくなりゅうつ♡」

ユリアーナ姫 「ああ♡ ああんつ♡ 妊婦さんのお腹に、連続でお射精だなんて…：んあ♡ 元気な触手さん、ですわね…ひや、う♡」

アンナ 「あ、あ、溢れてるのつ、もうピストン止まつへえつ♡ あ、あン♡ ああ…：あ、んつ？ 止まつた…？」

ユリアーナ姫 「ふうう♡ ふうう♡ あ、ピックって動きました……触手のあかちゃん……ああ♡、ドキドキしますね♡」

アンナ 「ま、待って、心の準備が♡ んうううーつ、んふうううーつ！ あ、あ、触手抜かないれっ、太いのを抜かれたら……あ、あ、本当に出りゅつ、赤ちゃん、ん、あつ♡」
ユリアーナ姫 「ひつ、ああツ♡ あ、あ、プチプチって音♡ すう、はあ……ひやツ♡」
子宮の入口♡ 通つて、あああ♡ 生まれちゃううううう♡♡♡♡♡「

アンナ 「んんうつ♡♡ ひめしゃまお氣を確かに♡!? んああ、♡ 卵つ、私もおおツ
オマンコ、があつ……ひ、拡がりゅ……また産まれりゅ ♡ ぶぴゅぶぴゅつ、産むだけで
イッちゃつて私もお♡♡♡♡

「……」
ユリアーナ姫 「ひや♡ 赤ちゃん、生まれたばかりの触手さんがつ……ん、ふあ♡
んなにいおつきいの!? あひいん♡♡♡」

おこはい吸って!!
あふんツ
アンナ 「んー!!」
んはあ♡ みるく!? ミルク出てる!?
触手赤ちゃん産みながらミル
クしゅわれて♡♡
ひあ♡ んんつ♡♡♡!?」

ユリアーナ姫 「ああ、私もおっぱい出ちゃって♡ ん♡ 乳房に張り付いて一生懸命ミ
ルクしゅって、ふふ♡ んはあ♡ 子宮の触手さんも早くミルク飲みたいって♡♡♡
さつきより産まれるのはやくううつつ♡♡♡♡♡?

アンナ 「あ、うう♡ ひめしやま♡ ああ、水風船みたいにお腹膨らまして、触手お産みに……んあ♡ だめえ!! おっぱい一つだけだから!! そんなにたくさんは♡♡♡」

アンナ 「ひあっ♡ あ、ああ♡ でも、もうすぐ……まで、おい!! それは……さつき私たちに卵産みつけた……あ、あ♡」

ユリアーナ姫 「んんっ♡ 産卵ちんばさん♡ ひやあん♡ も、もう一度ですか!? ふう、ふあ♡ ああ、さすがに壊れてつ、んんんっ♡♡♡♡♡」

アンナ 「ひああ♡ 赤ちゃん搔き出してまた入つて!? まさか、その卵袋にはいつて卵全部産み付けつ♡♡♡ んおつ!? んんっ♡♡♡……ふうつ、ふああ♡ さっきより大きいツ♡ こ、こっちが本番なの♡♡♡!?」

ユリアーナ姫 「ちゅる♡ あむ♡ ん♡ 今回は明日の日が昇るまで見たいですっね♡ アン、大丈夫。私の騎士は♡ これぐらいでえつ、んお、っ♡ でも、私はちょっとはしたないところ、見せるかもしませんが♡ あひつ♡ がんばりましょう♡」

アンナ 「ひ、日が昇るまでっ!? あ、あ♡ こんな触手のつ、精液付で苗床を!? んん♡ わ、私は姫様の騎士つ、ですが♡ お、おひりまで入つへ……んお、♡♡♡ 両方、突つ込んじやらめえつ♡ おひつ♡ んひい♡♡♡♡♡!?」

アンナ 「媚薬毒のせいでの、全部気持ちいいに変わつて♡ オマンコもお尻もおつ、だめ、もう入れないで!? んおつ♡ 順番にじゅぱじゅぱ♡ んあつ、ああツ♡ 卵産みつけられる袋になっちゃうう♡♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あひいっ、せーしいっぽい♡ んぶつ♡ ザーメンプールみたいに精子の海に浸つて触手赤ちゃん生むのつ♡ これしゅごい♡ ま、また産んじゃう!?」

アンナ 「ひッ!? 姫ひやまあツ♡ ああ、私もまたいっぱい産まれるううう——ツ♡」

ユリアーナ姫 「つ、はあツ、ああツ♡ お乳が張つてゐるけど、赤ちゃん触手の皆さん元氣で♡ 乾く暇も♡ あ、んうツ？ そ、そちらは乳首ではなく、クリトリスですのに…」
…は、ああツ♡」

アンナ 「つ、姫様お気を確かにッ！ つて あ、あ、まさかまた、ふたなりに変化ひゆるのでは… んくつ、ああ♡」

ユリアーナ姫 「んつ、まだ恥ずかしいですね♡ 私のおちんちん♡ ……はお、はあ♡ 触手さんの計らいで私でも精液、んあ♡ アンに種付けできるようにしていただいたみたいですね♡」

アンナ 「ひつ、姫様？ え、えつ、種付け……あ、あ、姫様あつ♡ 私はまだ、返事を… んううツ♡ あ、あ、産んだばかりのオマンコにいきなり突っ込んじや、イううツ♡ あふつ、ああ♡ まだ中に卵残つてりゅのにい♡ チンポの先っぽ♡ 子宮グリグリらめえつ♡」

ユリアーナ姫 「はつ、あ♡ 膣の柔らかさと卵の不気味さが、たまりません♡ んつ♡ ああ、もう一度アンのおマンコを味わえるなんて♡ んあ♡ 沢山種付けして沢山産みましょうね♡」

アンナ 「んあ♡ ひめしゃま!? ひめしゃまあ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「んつ、んうつ♡ アンのふわトロオマンコ♡ 触手の赤ちゃんのおかげで前よりもドロツドロに蕩けちゃつへ……あ、あ♡ 子宮まで入りそう♡ ごめんなさい、さきにあやまつておきますね…」

アンナ 「んお、♡ んん、♡ え、え、ええ!」

ユリアーナ姫 「はあ、はあっ♡ こんな、こんな気持ちいいの止まらなくなりそうです♡」

アンナ 「あああッ♡ あああッ、あひ、んひいいッ♡ ひややい!? ひめしゃまのオチンポ!? 子宮の中までえ♡ ひやいつてきて♡♡♡♡!?!?」

ユリアーナ姫 「んひい、触手さんに入れられてえ♡ アンに出し入れして♡ 止まりません♡ おちんちん、オチンポしゅてき♡♡♡」
アンナ 「ああんツ♡ 姫様の精子!? ダメなのに、ああ♡ おちんちん思い出しちゃつた♡♡♡ 姫様のふたなりチンポの味、思い出したら♡ 私、わたし♡♡♡!?!?」
ユリアーナ姫 「ふああ♡ あはっ♡ アンったら脚でがっしり捕まえちゃって♡ ええ、ええ♡ 奥の奥まで種付けして上げます、ね♡」

アンナ 「あ、ひいツ!? ひぎッ、あああああッ♡ はあッ、ああッ♡ ばちゅんつ、ばちゅんつてえ♡ おお、おおッ♡ 姫ひやまのチンポ、奥まで……しし、子宮をブツ刺してしまっておりまひゅつ、あああッ♡ 種付けプレスう♡ ありがとうございまひゅつ、ありがとうございまひゅううツ♡♡♡ ちゅ、う♡」
ユリアーナ姫 「ええ、ええ♡ とってもかわいくてエッチで素敵ですよ私の騎士♡ ご褒美に、子宮へ直接ザーメンを注いで♡ 触手赤ちゃんいっぱい孕ましてあげます、から♡……はあ、うんツ♡」
アンナ 「あ、ああ♡ 姫ひやまのオチンポと触手チンポなかですれつ♡ 擦れてえ♡ 下さいドロドロザーメンを注いで子宮にキスひながら溺れるぐらいザーメンびゅううつ、びゅううつつて種付け射精くだひやあああ——ツ♡」

ユリアーナ姫 「つ、ああ♡ ア、ン……おひんひん出ちやうううううううう——ツ♡ 出りゅつ、いくううツ♡ あ、ああッ、出ちや……んはあああ——んツ♡」

ユリアーナ姫 「あふっ、ああ♡ アンの子宮にふたなりチンポでキスしながら出へりゅう♡ どくんつ、どくんツ♡ 種付け射精♡ イきますうつ……あはあ♡」

アンナ 「姫様のせーし♡ あ、あ♡ いっぱい♡ あひゅいっ精子♡ 卵にびゅぴゅつてかかってるのわかる♡ 種付け射精ありがとうございましゅうつ♡♡♡」

アンナ 「あ、頭の中、真っ白れひゅ……イキひゅぎておちんちんのことしか……んくつ、んはあ♡ あ、え……ああツ!? また、産まれちゃう……あ、がツ……姫様が種付けした触手赤ちゃん、産んじやうううううう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ひうツ!? わ、私も……触手さんにいただいた精子で卵が……あふんツ♡ 子宮が熱いツ……はひつ、んはあツ！」

ユリアーナ姫 「あ、あ、アン一緒に！ また、触手さんの赤ちゃんいっぱい♡ アンと一緒に噴水みたいに♡ 一緒に苗床出産でイッちゃいましょう♡♡♡」

アンナ 「姫ひやまッ！ ちゅつ、あ、ああ♡ 姫ひやまのふたなりチンポ、抜けつ!? んひい♡ アンもつ、騎士失格ですが、苗床としてならつ♡ 一緒にしょくしゅしゃんの、姫様の赤ちゃん産んでつ♡ イキましゅう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ああんツ♡ 出る出りゅ出る、出りゅのおツ♡ 触手の赤ちゃんぶりゅびゅる♡ 産まれ……りゅううつ——ツ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「つはあああツ♡ は、あ……赤ちゃん止まりまひえんわつ♡ おおつ、おおツ♡!! 産まれながら、お、大きく……ひ、ぎいいいツ♡」

アンナ 「ひツ、あああツ！ 私もつ、お乳があツ！ ミルクおちんちんみたいにどびゅどびゅ止まらなくツ♡ ああつ、吸われへりゅツ♡ 触手赤ちゃんにお乳のまれていくう♡ あひいいツ♡」

アンナ 「戻れなくなるう♡ ひめしゃま戻れなくなっちゃいます!?! 触手産むの気持ちよすぎて♡ ひゃん!? 卵植え付けられるのもつ、精液中出しされるのもつ、せーしプレーで出産アクメしちゃうのも、しゅごいっつ♡♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ああんッ♡ もう周りは私たちが産んだ赤ちゃんと精液でいっぱいですね♡ もっとおっぱい吸って、卵植え付けてくださいな♡ はあんつ♡ 私も、もっと犯して戻れなくして下さいっつ♡♡♡♡」

アンナ 「ひ、姫様?! あ、姫様のふたなりチンポ、また!?! ん、んんつ♡ アンは、アンも一緒ですからっ！ アンの中で、おっぱいでも気持ちよくなつて、いっぱい種付け射精してください！」

アンナ 「んはあ♡ で、でも、ちょっと、あ♡ ああ♡ 手加減していただけると♡ ああひいっ♡ 朝まで身体もちませんから♡ あ♡ あつ♡ あああ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「アンつたらこんなに締め付けて相変わらず、嘘が下手ですね♡… ふあつ♡ 触手さんもこれからが本番みたいですし♡ ああ♡ 沢山沢山かわいがつて、孕ませて、種付けしていただきて、触手赤ちゃん生みましょう♡♡♡♡」

アンナ 「んひい♡ 前後両方♡♡ んあつ♡ あ、あつ♡ あああ♡♡♡…！」

シーン6

ハッピーエンド？

アンナ 「ん？……もう入りましょん……あ、あれ？」

アンナ 「姫様、朝陽が！ 本当に日の出とともにダンジョンを出してくれるとは、触手もなかなか義理堅い……、あの、姫様？」

ユリアーナ姫 「アン。貴女は外へ。私は、このダンジョンに残りますわ」

アンナ 「残る……な、なぜ触手屋敷などに！？ 考え直してください姫様っ！ お国のことも、ここからだというのに……」

ユリアーナ姫 「もう、国を取り返すことは考えておりませんの。私とアンが他国へ助けを求めたとしても、結局何も変わりません。むしろ事態は悪化しますわ。これまでの放浪で、アンも薄々は感じていたでしょう？」

アンナ 「あ……」

ユリアーナ姫 「あと、触手さんとの相性がとてもよかつたので♡ 初めてを捧げた相手に嫁ぐとは決めていましたが……まさに運命以上の出会いですわね！」

アンナ 「相性っ！？ ひ、姫様あ……うう、一体なんと説得すれば……つ？ そこの触手！ 無関係を装って覗かないでほしい！ ま、満更でもなさそうに照れるな、この下劣なモンスターめえっ」

ユリアーナ姫 「あらあら、アンの八つ当たりだなんて珍しいですわね♪ ふふ……とうわけで、アンはアンらしく、自由に生きてください。主からの最後の命令です」

アンナ 「……かしこまりました。では私は、ご命令通り自由に生きましょう。とでも、

言うと思いましたか！ 私も残りますよ姫様」

ユリアーナ姫 「えっ？」

アンナ 「私の主は姫様のみ。貴女に一生着いて参りますよ、我が君。我が心の王ユリアナ様」

ユリアーナ姫 「私の騎士……」

アンナ 「それに、こんなへ、変態触手に任せられません……あ、あんな激しいの姫様だけにまかせたら、わ、私が半分は……」

ユリアーナ姫 「アン、わかりました。私はもう触手さんのお嫁さんではありますけど、：アンの旦那様としても、頑張りますね！」

アンナ 「だ、旦那様！？」

ユリアーナ姫 「まあ、触手さんも賛成なのですって♪ これは、大家族ができそうな予感がいたしますわね♡」

アンナ 「ま、まあ姫様が幸せそうなら。あ、それから触手姫様を泣かせたら、いや夜はともかく、私が承知しないからな!……あと……ふ、ふつつか者だが、よろしく、頼みますっ」